# #22

土曜日の朝、犬の散歩に出かける用意をしているとカレがいつものほうきを持ってこちらを見ていた。

以前見た夢では、カレは科学者が着るような白衣姿をしていたが、今朝はいつも通りカレだった。

何かを伝えたいような視線を僕に投げかけているような気がするが、そんな訳は無い。

だって、カレは毎朝ほうき掃除をしているただのカレに過ぎないじゃないか。その視線を振り払い、僕は犬たちと急いで散歩に出かけた。

歩きながらカレについて考えてみた。意外と白衣姿も似合っているではないか。少し病的なインテリ科学者といったところだ。

世の中には色んな人たちが生活している。僕もカレもサヤカもそうだ。見る人によっては、僕も変わり者に見えるかも知れない。

そうだ。この犬たちは僕をどう見ているのだろうか。忠誠を誓うだけの価値がある立派な飼い主なのだろうか。それともただの自動餌配給装置、もしくは自動散歩付き添いロボットなどに見えているのだろうか。

今日は、町内を一周して帰ってきた。早速、犬たちに餌を配給して早々に部屋へ上げた。
サヤカはちょうど洗濯物を干していた。僕は自分の部屋へ行き、昨夜取り出し忘れた携帯電話を通勤鞄から取り出そうとした。
そのとき、携帯電話と一緒に何やら紙切れが一枚落ちてきた。薄青色の紙は奇麗に折り畳んであり、中には文字が書いてあるようだった。
僕は特に何も感じずその紙を拡げてみる。
『おはようございます。毎朝お会いしますよね・・・・』
全て読んでしまう前に、慌てて紙を元通りに折り畳んでジーンズのポケットに入れてしまった。
この歳になってラブレターなんてものではないだろうが、何分慣れないことなので胸がドキドキしてしまう。
咄嗟に思ったことは、『サヤカに見つかる訳にはいかない』である。
別に後ろめたいことは何もないのだが、要らない心配をかけたり嫉妬心をかき立てることもあるまい。
僕は平静を装い、いつも通り朝食を済ませた。
「今日これから、この前に話した例の紳士の所へお邪魔してくるよ」
僕は最高のアクターかも知れない。

「分かったわ。何時頃帰ってくるのかしら。お昼ご飯は用意しておいた方がいいかしら」
いつもの口調でサヤカは言った。
僕は最高のアクター気取りでこう返す。
「そうだね。何時になるか分からないからお昼はいいよ。帰るときメールするからね」
そして、服を着替えて僕は坂本晃三のもとへ出かけた。

#23

僕の家からはそんなに離れていない場所にある。昔から近くを通ることもあったが、これが奈良史跡文化研究室だとは知らなかった。
歩いて行くこともできたが、敢えて車で行くことにした。
家には、サヤカが乗る赤いスカイラインクーペと、僕が乗るランドクルーザーシグナスの二台がある。
今日はスカイラインクーペを借りることにした。ピカピカのボディーと大きなアルミホイールはいかにもエロティックな風情を醸し出す。
よく晴れたこんな日に、木々に囲まれた道路を走るにはぴったりの車だ。
僕は白いニットに細身の黒いスーツでシートに座る。時計の針は十時を回ろうとしていた。

やや広めの駐車場に車を止め、降り際に運転席のガラスに映る自分の顔を確かめた。深呼吸をしてから玄関に向かう。

外観は黒い木の柱と白壁で構成される明治時代の建造物に見えるが、玄関を一歩入ると非常にモダンな佇まいで驚いてしまった。

白い大理石の床と大きな吹き抜けがあり、真正面には床から天井まである大きなガラス越しに日本庭園が広がっていた。

その左に受付らしきものがある。流線型のカウンターには二人の女性が上品かつ控えめな表情を浮かべ僕を待っている。

先日、僕が電話したときに応対してくれたのはこの二人の内、どちらかの女性なのだろう。

あのすばらしい声の持ち主はどちらなのか、とても気になった。

僕はカウンターに近づき、背の高い方の女性に向かって言った。

「夏岡と申します。坂本先生とお約束しているのですが」

グレーの制服に身を包んだ彼女は、笑顔で言った。

「夏岡様、お待ちしておりました。ご案内致しますのでこちらからどうぞ」

やはりそうだ。すばらしい声は彼女だった。想像通りの容姿だったのでなんだかうれしくなってきた。

一人でほくそ笑んでいると、僕の前を歩く彼女が話しかけてきた。
「夏岡様、ずいぶんと背がお高いですね。それにスマートでいらっしゃるので素敵ですわ」
社交辞令まで完璧なようだ。こんなに美人な受付嬢が初対面のお客に対して思わせぶりな言葉を簡単に投げかけることに僕は少しムッとして言った。
「貴女も相当美しいですよ。声もすばらしいしお顔も完璧だと思います」
僕は本当にそう思ったのでストレートに言ってみた。彼女は予想外の返答に少し戸惑い、頬を紅く染めているようだった。
「あ、すいません。つい思ったことを言ってしまったもので。でも本当にお美しいと思いますよ」
僕は場を取り繕うためにフォローしたつもりで言ったのだが、彼女は耳まで紅くしてしまい終始俯いたままだった。
「こちらになります。坂本教授、夏岡様をご案内して参りました」
先ほどとは打って変わって、彼女の声が幾分か小さくなっている。かなり照れている彼女を見ていると、少し可愛く思えてきた。
真っ黒なドアのちょうど目線の高さに金色の文字で、『主席研究員・坂本晃三』と書かれていた。ドアの取っ手に手を伸ばすと、彼女は会釈をし去って行く。歩き方もモデルのように流暢で、細くくびれたウエストが後ろ姿の中で最も目立っている。

気持ちを切り替え、僕は視線を部屋の中にやり軽く会釈をしてから入って行った。
坂本晃三は高級そうな革の椅子に座り、デスクに向かっていた。パソコンの画面から僕の方に顔を向けるといつもの笑顔を作った。
「ようこそ。さぁ、そこのソファーにでも掛けてくれたまえ」
僕は促されるまま腰掛ける。意外にも部屋は整然としており、映画であるような所狭しと本が山積みになっている光景はない。
「案外、シンプルな研究室なのですね」
僕は少しだけ皮肉っぽく言ったみたいだ。
「そうですな。最近は全てインターネットで情報が手に入るので昔のように書籍に埋もれるようなことはあり得ませんね。いやはや便利な世の中です」
ふと、壁に目をやるとたくさんの写真が貼付けられていた。細かくは見えないが、どうやら白衣を着た坂本晃三と、同じく白衣を着た同僚らしき人達が写っているようだ。
「どうですかな。これから少し中をご案内しましょうか。一般の方にはお見せしていないものもありますので楽しめると思うのじゃが」
窓の外を見ながら坂本晃三は言った。
「しかし、よい車におのりですな。私も昔はスカイラインに乗っておりましたが、確かによい車でした。少々角張っておりましたがね・・・・」

坂本晃三に案内され、三階にある三つの研究室から二階の食堂、一階にある資料室までを四十分そこそこで一気に歩いた。先程から気付いていたのだが、この建物には至る所にカメラが備え付けてあるのだ。

余程セキュリティーに気を配っているのだろう。

受付の横にあるロビーで小休止する。坂本晃三がコーヒーを持ってくるよう受付に指示した。

コーヒーを運んで来てくれたのはさっき案内してくれた女性だ。

「失礼致します」と言いながら僕の前にカップを置いてくれた。白く細い指の先にはピンク色のマニキュアが施されたいた。

「どうもありがとう。ところでこちらは禁煙でしょうか」

僕は坂本晃三を見てから彼女の方に視線をやった。

「どうぞ、どうぞ。私も吸いますので問題ありません」

坂本晃三は胸ポケットからピースを取り出し口にくわえたと同時に、彼女は灰皿をテーブルの上に置く。コーヒーを持ってきたお盆の上に既に灰皿を用意していたのだ。

なんてよくできた受付嬢なのだろう。僕は心底感心した。

「ごゆっくりどうぞ」

笑顔の彼女はそう言い残して、この場から離れていった。

僕もピースを吸っている。ピーススーパーライトだ。口にくわえた瞬間、坂本晃三は高級そうなライターで炎を差し出した。

「お疲れさまでした。実は最後にどうしてもお見せしておきたいものがあります。これを吸い終えたら行きましょう」

坂本晃三はそう言いながら、穏やかな表情でタバコの煙を飲み込んだ。

僕は先程から不思議で仕方なかった。一体ここへ何をしにきたのだろうか。坂本晃三は何を企んでいるのだろうか。

僕は先日届いたメールマガジンについて問いただしてみた。

「僕のパソコンに『奈良史跡文化研究室』からメールマガジンが届きました。登録した覚えがないのですが、一体どういうことなのですか」

坂本晃三は奇妙な顔で言った。

「おかしいですな。うちではメールマガジンなんてもの発行していないが」

とぼけているようには見えなかったが、更に突っ込んで問いただしてみた。

「株式会社Ｚというところが、こちらの依頼を受けて発行していると記載してありましたね」

坂本晃三はかなり困っているようだった。

「株式会社Ｚですな。うちの方で一度調べさせます。いや、ご迷惑をおかけした」

どうやら本当に心当たりが無いようなので、この話はここまでにした方がよさそうだ。

「さぁ、それでは参りましょう。こちらです」
タバコをもみ消し僕たちは立ち上がった。坂本晃三のエスコートでロビー横のエレベータに乗り込む。

続く